

台風情報の高度化に関する検討会（第1回） 議事概要

1 開催日時及び場所

日時：令和6年9月4日（水）10:00～12:05
場所：気象庁7階会議室1（ウェブ会議併用）

2 出席者

（委員）

伊藤 耕介	京都大学 防災研究所 暴風雨・極端気象研究領域 准教授
今村 涼子	オフィス NickNack 所属 テレビ朝日気象キャスター
大月 隆司	日本放送協会 報道局 災害・気象センター長
喜々津 仁密	国土交通省 国土技術政策総合研究所 建築研究部 建築品質研究官
副座長 高薮 縁	東京大学 名誉教授
竹之内 健介	香川大学 創造工学部 准教授
堤 浩一朗	LINE ヤフー株式会社メディアカンパニーヤフーメディア統括本部 Yahoo!天気・災害 企画
座長 筆保 弘徳	横浜国立大学 総合学術高等研究院 台風科学技術研究センター長 教授

（話題提供）

東京都 総務局 総合防災部 防災計画課
一般社団法人 日本建設業連合会

（気象庁）

室井大気海洋部長、濱田業務課長、佐藤気象リスク対策課長、杉本予報課長、吉松気候情報課長、石原アジア太平洋気象防災センター長、後藤海洋気象情報室長、深町気象情報企画官

3 議事

- （1）本検討会の開催趣旨について
- （2）台風情報の現状と課題について
- （3）台風情報の活用状況と要望について（東京都、日本建設業連合会）
- （4）検討課題と論点について

4 委員からの主な意見や質疑

(1) 台風情報の現状と課題について

○気象庁 HP の台風情報のページから波浪や高潮の情報にリンクされていないのが不便に感じる。実際に災害を起こす風、波浪、高潮、大雨の情報にリンクするボタンがあるとよい。

また、キキクルのようなボタンで重ね表示ができれば分かりやすい。

⇒（事務局）デフォルトでは別ページでの表示となっているが、「あなたの街の防災情報」ページでは表示情報をカスタマイズできるようにしている。

○数年前の気象庁 HP リニューアルから、台風経路図において1日先まで、2日先までのように1日刻みで予報円を表示できなくなったのは不便に感じる。特に先日の台風第10号のように動きが遅い台風では、予報円が重なって日ごとの予報円が非常に分かりにくい。

○気象庁 HP の台風情報のページで、台風の強さや移動速度の情報がデフォルトで表示されなくなったのは不便に感じる。

○数年前の気象庁 HP リニューアルについて、ダイナミックに分かりやすく見せるために地図をメインに様々な情報を重ねて表示できるようにしたという意図はよく分かるが、中途半端にカスタマイズしすぎていると感じている。地図で見せるのは民間でもやっており、気象庁 HP にアクセスする人は、気象庁だからこそ出せるベーシックな情報の提供を期待しているのではないか。

○気象庁の資料で、地表面からの高さが高くなるとどれくらい風が強くなるといった解説が見つけれなかったため、気象庁 HP の知識・解説ページなどに情報があればよい。

○24 時間以内に台風が発達する熱帯低気圧に関する情報について、何年か前まではその情報が出て結局台風にならなかった事例が散見されていたが、ここ数年は減っているように思う。これは精度が上がったからなのか、それとも今後も台風にならない事例はありうるものなのか。

⇒（事務局）精度は上がっているが、今後も台風にならない事例はありうる。

(2) 台風情報の活用状況と要望について

ア 広域避難における台風情報の活用について（東京都）

○広域避難タイムラインの適用判断に有用な予報の時間間隔についてどう考えているか。

⇒（東京都）例えば雨量の予測では3日間積算雨量が400mmを超えるかどうかを一つの判断要素としているところだが、雨量の予測は不確実性が高いとも聞いているため、時間間隔も含め、精緻化されるのは有難い。

イ 建設業における台風情報の活用について（日本建設業連合会）

○6か月前からの情報は、地域ごとではなく日本付近に存在する台風が平年より多いか少ないかという程度の情報になると思うが、それでも有用なのか。

⇒（日本建設業連合会）そのような情報でも有用と考えている。

○強風・暴風確率などの確率的な情報は、一般向けには使い方など注意が必要だが、技術者向けには有用な情報ということではよいか。

⇒（日本建設業連合会）安全に工事を行うことが最優先であり、確率情報がなく事故が起きてしまう方が重大であるため、確率情報は有用な情報と考えている。

○報告いただいたものの他に、現状の気象庁の台風情報に関して要望はあるか。

⇒（日本建設業連合会）波浪の情報が48時間先までとなっており、作業船等の退避の判断には短いため、もう少し長い時間まで情報があると有難い。

（3）検討課題と論点について

ア 全体

○新たな情報発信を検討する場合には、技術的に何ができるのかという点に加えて、社会がどう受け止めるかという点を考慮することが重要。個々の企業や自治体への個別最適も重要ではあるが、社会の全体最適という観点も含めて検討することが重要。

○台風情報ページから台風に関連した波浪等の情報にもリンクからたどれるなど、様々な情報をワンストップで提供できればそれらを有効に活用できることに繋がる。企業や自治体は民間気象会社等から詳細な情報を受けていると思うが、一般の方も詳細情報にたどりつけるようにすることで、広域避難や小規模な事業者の防災対応に繋がるのではないか。

○メディアの報道について、若い人たちはテレビを見ていない方も多いため、インターネットも含め報道のあり方について整理が必要。

○教育課程に台風情報の入手体験などを組み込むことが重要。小学生くらいからそれを体験することで、防災につながる情報を自分でも入手できるということを覚えてもらえる。子どもたちから家族にも伝えてもらえる効果もある。

○台風情報は気象庁が責任をもって発表すべき社会の基盤情報であり、基盤情報としてどのような情報が求められるのかという観点が重要。また、社会全体で共通認識を持つための情報とするために何が必要かという観点も情報の中身を考えるうえで重要。現代の日本社会は時間に着目し、時間による影響を大きく受ける社会でもあり、暴風到達時刻など、

どの時間帯に注意すべきかが分かる情報は社会的にメリットがある。

イ 早めの備えを促す情報について

○エルニーニョやマッデン・ジュリアン振動等の予測精度が向上しており数か月先の台風情報を提供することは可能ではないか。

○一般視聴者の防災啓発という観点で、1～2週間先から1か月先までの予報は使いやすい。台風第10号のようなインパクトの大きい台風が去った後、次の台風がいつ頃来るのかという視聴者の興味に応えられるとともに、防災意識を高めてもらうのに非常に有効。6か月先までの発生数が多いか少ないかという情報は、防災啓発の効果は弱いかもしれないが、ニュースとして話題になるため、あれば利用する。

○様々な時間スケールの情報を提供することについては、視聴者ニーズも高く異議を唱えるものではないが、早めの情報がどこまでの精度を担保できるものなのかという点が重要。精度が低過ぎる場合は社会活動へ悪影響を及ぼす懸念がある。民間企業であれば民間の気象会社から早めの台風情報を有償で提供してもらい、精度も含めてシビアに判断していると思うが、一般の方については精度の低さや情報の扱い方についてしっかり認識してもらい、社会の混乱を招かないように情報提供する必要がある。

○1か月先までの情報は一般の方も今後の予定の計画等で我が事感を感じられるため、一般向けに分かりやすく提供できればよい。事前に予定を変更する方が増えれば、公共交通機関の計画運休で影響を受ける方も減るのではないか。

ウ 台風の特徴を伝えるきめ細かな情報について

○進路予報・強度予報について7日先までなら誤差は大きいものの意味のある情報を出せるのではないか。

○台風に伴う災害は、風に伴う暴風・波浪・高潮による災害もあるが、雨による災害も多い。先日の台風第10号では暴風と大雨の発生場所が異なっていた。風と雨の両方の情報がリンクして伝わるような情報提供の仕方がよい。

○台風予報の時間間隔について、先日の台風第10号のように動きが遅い場合は24時間刻みでも問題ないが、動きが速く24時間先と48時間先の予報円の間に日本列島がある場合などでは危機感が薄れるため、36時間先など短い時間間隔も選べるとよい。

○雨の予報はGSMやMSMの動画でいつ・どこで強まるか分かりやすく示せる一方、風の予報は矢印や流線で示すことが多いが、いつ・どこで強まるかイメージしづらい。例えば、

米国の暴風到達時刻のように早ければいつから風が強まるかが分かる情報など、風の詳細な情報を提供できればよい。

○現行の予報円と暴風警戒域の表示方法は、ある意味で予報の誤差をうまく織り込んでおり、40年以上にわたって変わっていないため国民にも定着している。現行の情報を変えなければならないという前提に立つのではなく、現行の定着している情報をベースに検討して欲しい。

○今後の詳細な情報や時間間隔の細かい情報によって伝え方が難しくなるかもしれない。3日先までの雨量予測情報を面的に提供するなど、リアルタイムの情報と一定の時間間隔をもった情報を並行して見せることができれば、即応性もあり、災害のスケール感も伝えることができる。

○先日の台風第10号は、日本近海の海面水温が高く日本近海で急発達するなど新たなフェーズに入ったと感じる。また、台風本体だけでなく周辺で大きな被害が発生した。これまでの台風報道は台風本体を中心に報道してきたが、台風本体以外の現象もうまく伝える必要がある。専門的な情報を伝えることは重要だが、新しい防災気象情報とも整合を取りつつ、より分かりやすく伝えることも重要。

○令和元年房総半島台風の被害調査において、沿岸部とそれ以外の内陸部では風による被害の程度が異なっていた。そのようにエリアごとに被害が異なることについて、可能であれば防災上の留意事項として伝えられるとよい。

○風の詳細な情報として四象限の情報は有効。強度予報の精度があまり向上していないが、数値予報の精度向上を進め、数値予報に基づく風の詳細な分布を出すことができるか、台風から離れたところの雨の情報も含めて情報の出し方について検討を進めて欲しい。

○台風情報は住民の警戒スイッチが入る重要な情報であり、詳細化や精度向上をお願いしたい。一方で、温帯低気圧化すると情報がなくなり、危険性が変わらなくても安心感をもたらすことに繋がっているため、温帯低気圧化後の情報のあり方については検討が必要。

○台風の進路や上陸は重要な情報だが、台風から離れたところで大きな影響がある場合もあるため、台風の影響でどのような現象が起きて、どのような被害が起きるのか、またどういう備えが必要なのかという、住民の避難や被害を減らすことに繋がる情報が重要。